

# 愛知教育大学教職キャリアセンター 教育支援専門職研究部門 報告書

教職キャリアセンター 教育支援専門職研究部門  
部門長 安藤久美子(心理講座)  
研究委員 岩山絵理(福祉講座)

## 教育支援専門職研究部門の概要

愛知教育大学 教職キャリアセンター 教育支援専門職研究部門は、教職キャリアセンターの「実践力育成」「高度化推進」「再教育支援」の3つの柱に基づくロードマップのうち「実践力育成」及び「高度化推進」のための開発領域の研究部門として、「チーム学校」への理解の促進及び新課程の教育体制の検討を目的に、平成29年度から教育支援専門職部門での研究を開始した。この5年間の成果について報告する。

5年間の研究における成果物として、大学3年生向けの教材を作成し、教材冊子とDVDを今回、同封したので、ご高覧のご上活用いただきたい。

### 平成29年度の主な活動

センター長 西淵茂男 部門長 森川夏乃(心理講座) 研究員 荷出翠(福祉講座)

- ① 新部門の立ち上げ
- ② 「チーム学校」アンケートの実施
- ③ 他大学への聞き取り調査

### 平成30年度の主な活動

センター長 西淵茂男 部門長 森川夏乃(心理講座) 研究員 岩山絵理(福祉講座)

- ① 「チーム学校」アンケートの継続実施
- ② 不登校アンケートの実施(名古屋市)
- ③ 「チーム学校」の認知度を高めるためのワークショップ開催

### 平成31年度の主な活動

センター長 西淵茂男 部門長 森川夏乃(心理講座) 研究員 安藤久美子(心理講座)  
研究員 岩山絵理(福祉講座)

- ① 「チーム学校」アンケートの継続実施
- ② 教職課程学生・教育支援専門職養成課程学生の合同授業実施

### 令和2年度の主な活動

センター長 杉浦慶一郎 部門長 安藤久美子(心理講座) 研究員 岩山絵理(福祉講座)

- ① 「チーム学校」アンケートの継続実施
- ② アンケート及び合同授業の結果からの教育課題の抽出
- ③ 「チーム学校」を理解するための学部教材の検討

### 令和3年度の主な活動

センター長 杉浦慶一郎 部門長 安藤久美子(心理講座) 研究員 岩山絵理(福祉講座)

- ① 「チーム学校」調査結果分析
- ② 「チーム学校」の理解を促す授業教材の提案

## 平成 29 年度報告

### 1 他大学への聞き取り調査

教育支援専門職研究部門は、「チーム学校」で活躍するスクールカウンセラー(以下、SC)やスクールソーシャルワーカー(以下、SSW)、学校事務を養成することを目指して活動がスタートした。そこで、まずは、SC の養成、SSW の養成に関する聞き取り調査を実施した。

### 2 「チーム学校」アンケートの立案と実施

教育大学の大学生がどのように「チーム学校」について学び、理解を深めていくのかを検討するために、毎年学生に質問紙調査を行い、その内容を分析する計画を立てた。この年度から設立した教育支援専門職養成課程(心理コース・福祉コース・教育ガバナンスコースの3コース)の最初の学年である1年生および教員養成課程の1年生を対象に調査を行った。

#### 【目的】

学生がいかに“チーム”のスキルを持ち、連携・協働に関する認識をしているかについて測定する尺度を開発し、学生の「チーム学校」の理解について検討すること。

#### 【方法と対象】

平成 29 年 11 月に授業時間を利用して、本学の全 1 年生の学生に対して一斉にアンケートを実施した。866 人に配布を行い、729 人からの回答を得た(回収率 84%)。そのうち、回答に不備があるものを除した 723 名のデータを分析対象とした。教員養成課程 588 名、教育支援養成課程 135 名であった。

#### 【結果の概要】

「チーム学校」の理解度尺度の因子分析の結果、「連携スキル」、「教育支援専門職の理解」、「連携への積極性・開放性」、「教師中心性」、「分業意識」の 5 因子が見いだされた。また、教師を目指す教員養成課程の学生と、SSW や SC、学校事務を目指す教育支援専門職養成課程の学生との間で、「チーム学校」の認知度及び理解度に差が見られるかを検討したところ、教員養成課程の学生よりも教育支援専門職養成課程の学生の方が、有意に「チーム学校」についての認知度が高く、チームとして多職種との連携や協働について前向きであることが示された。課程間での「チーム学校」の認知度の理解の差を少なくしていくために、両課程の学生の相互理解を促していく機会の必要性が示唆された。

本調査を継続実施することで、学生の学びや経験による「チーム学校」の理解の深まりを見ていくことができると考え、次年度以降も実施することとした。

### 3. 結果の公表

1) 森川夏乃(2019). 大学 1 年生の『チーム学校』の理解に関する研究 - 教員養成課程と教育支援専門職養成課程の比較を通して - 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 4, 51-57

## 平成 30 年度報告

### 1. 「チーム学校」アンケートの継続実施

教育大学の大学生がどのように「チーム学校」について学び、理解を深めていくのかを学年ごとに検討するために、教育支援専門職養成課程(心理コース・福祉コース・教育ガバナンスコースの3コース)および教員養成課程の1・2年生を対象に調査を行った。

#### 【目的】

チームとしての連携・協働に関する学生の認知や理解の程度について明らかにすることを目的とする。

#### 【方法と対象】

本学全1年生、2年生学生を対象に、それぞれ一斉にアンケートを実施した。1年生は889人に配布し、865人からの回答を得た(回収率97%)。2年生は866人に配布し、815人から回答を得た(回収率94%)。

#### 【結果の概要】

1年生から2年生になることで、「チーム学校」の認知度は高くなることが分かった。特に1年生には、教員養成課程と教育支援専門職養成課程との間で認知度の差が大きくみられたが、2年生においては、教員養成課程の認知度が高まり、課程間の差も少し小さくなることが示された。「チーム学校理解度尺度」について見てみると、1年生と2年生を比較しても、教育支援専門職養成課程の学生は、連携・協働に対して意欲的な姿勢あるいは必要性を感じているのに対し、教員養成の学生は教師が中心となって対応に当たっていくという認識は依然として見られた。

### 2. ワークショップの開催

平成29年度実施した「チーム学校」の理解に関するアンケート結果より、教員養成課程と教育支援専門職養成課程の学生において、連携・協働の認識に差があることが示された。この結果を鑑み、他職種の専門性や役割について、体験的に学び、両課程の学生の連携・協働に関する共通理解を深めることを目的としたワークショップ形式のセミナーを実施した。

#### 【開催時期・参加者】

開催日:平成30年12月5日(水)13時30分~15時00分

参加者:13名(福祉1年生3名、心理2年生1名、教職大学院生8名、教職大学院教員1名)

#### 【内容】

教職大学院生と教育支援専門職養成課程の学生の混合グループ(4~6人程度)を作り、お互いの学習内容や大学生活の過ごし方を含めた簡単な自己紹介を行った後、不登校の事例を提示し、グループでどのように対応を行うか検討を行った。その際、実際に自身が専攻する職種の立場から検討した。検討した内容は全体で共有し、ワークを通して他職種の役割や、他職種と連携や協働することの意義について考えを深めた。

### 3. 不登校アンケートの実施

#### 【目的】

不登校、虐待、貧困など多くの課題の中で、まずは、近年増加している、いじめ・不登校という課題について着目し、現場の教員及教育支援専門職への質問紙調査を検討した。今回は、不登校の児童生徒に対する多職種連携に焦点を当て、不登校問題に対する連携の実態について調査を行った。

#### 【方法と対象】

2019年3月に名古屋市内の中学校110校へアンケートを郵送し、その中学校に勤務し、かつ中心となって不登校児童生徒の対応に当たっている教員及びSC・SSWそれぞれに回答を求めた。110校へ配布した質問紙の内、59校から回収し(回収率54%)、59校すべてを分析に用いた。回答者の職種は、名古屋市内の中学校に勤務する教員64人、SC54人、SSW8人(市内12ブロックに各1名配置)の計126人であった。なお、一つの中学校から複数の教員が回答している場合もある。

#### 【結果の概要】

教員とSC・SSWとの連携について検討したところ、各職種における連携行動の特徴が示された。具体的には、教員においてはチーム内での仲介や説明、意見調整を多く行っており、SSWにおいては保護者や担任、専門機関との連携を行っていることが示された。これらの結果から、チームにおいて、教員は、チーム内の目的を共有し関係者が円滑にかかわっていくことができるよう調整を図る役割であることが推察される。そしてSSWは、校内外の関係者とネットワークを構築し、チームのコーディネートをを行う役割であることが示唆された。また、SCにおいては特化した連携行動は見られなかったが、カウンセリングなどの役割を担っていることが考えられた。調査結果については、報告書を作成し、名古屋市教育委員会に報告した。

### 4. 結果の公表

- 1) 森川夏乃・岩山絵理(2019).『チーム学校』に関する学生の理解に関する研究」日本教育支援協働学会
- 2) 安藤久美子・安藤直樹・岩山絵理・森川夏乃(2021)。中学校における不登校生徒に対するチーム援助活動とその実感された効果 - スクールカウンセラーの場合 - 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 6, 67-73

## 1.「チーム学校」アンケートの継続実施

### 【目的】

チームとしての連携・協働に関する学生の認知や理解の程度について明らかにすることを目的としてアンケートを実施した。

### 【方法と対象】

本学全 1 年生、2 年生、3 年生を対象にアンケート調査を実施した。授業時間を利用して、1 年生は、891 人に配布を行い、849 人から回答が得られた(回収率 95%)。2 年生は、849 人に配布を行い、773 人から回答が得られた(回収率 91%)。3 年生に対しては、全学で集まる機会が得られなかったため、授業時間を利用して、インターネットでのアンケート調査を実施した。3 年生 916 人に対して、回答フォームの URL の配布を行い、237 人から回答が得られた(回収率 26%)。3 年生の方法を変更したことにより、回収率が著しく減少する結果となった。

### 【結果の概要】

今年度 1 年生の傾向として、教員養成の学生において「チーム学校」を知っている学生の割合が例年よりも高かった。例年、教員養成においては、半数以上の学生が「チーム学校」を「はじめて聞いた」と回答している(2018 年度・2017 年度実施時は「はじめて聞いた」教員養成の学生は 6 割)のに対し、今年度は、「はじめて聞いた」学生は 5 割であった。また、どのようにして「チーム学校」について知ったのかを尋ねたところ、授業内と授業外が約半分であった。昨年度は授業外が 6 割、授業が 4 割程度であった。教員養成の授業において「チーム学校」が取り上げられることが増えたことが背景として考えられる。

2 年生については、1 年生の時と比較をすると、「チーム学校」の認知度が高まっていることが示された。これは、教員養成の学生における「チーム学校」の認知度が上昇したことが背景にある。1 年生時に実施した際には、教員養成では「はじめて聞いた」50%、「知っている」50%であったのに対し、2 年生になると、「知っている」と回答した学生が 85%まで増加していた。授業を通して理解を促されたと回答した学生が多く、徐々に専門授業が増えていく中で、「チーム学校」という言葉に触れる機会が増えたことが考えられる。

3 年生については、「チーム学校」の認知度、理解度を 1 年生・2 年生の時点と比較すると、認知度や理解度は徐々に上昇していることがうかがえた。また、課程別にみても、学年進行と共に、徐々に課程間の差は小さくなる傾向がうかがえた。こうした理解を促す背景として、学生から上げられた要因として多かったのは、学外での活動であった。教員養成の学生は、3 年生になると教育実習も始まり、教育実習や教職に関係するボランティア等の活動により、「チーム学校」の重要性を体感し関心や理解が高まったことが推察される。

## 2. 「チーム学校」入門合同授業の実施

「チーム学校」アンケートの調査結果より、在籍する課程によって、「チーム学校」の認知度や理解度に差がみられた。平成 29 年度には、両課程の学生に対し、連携・協働に関する共通理解を深めることを目的としてワークショップを実施したが、参加者は「チーム学校」にすでに関心があり、学びを深めるために参加したものが多く、関心が低い学生の参加を促すことが出来なかった。この結果を踏まえ、教員養成課程の学生に対する連携・協働についての学習の機会の提供方法を検討することを目的に、試行的に両課程の合同授業を実施した。

### 【開催時期・参加者】

開催日：2019 年 7 月 24 日 13 時 20 分から 14 時 50 分(90 分)

参加者：教員養成課程(社会)2 年生 49 名、教育支援専門職養成課程(福祉)3 年生 19 名、教育支援専門職養成課程(心理)1 年生 53 名

### 【内容】

場面かん黙の事例を提示し、個人で考え、ワークシートの記入をした。ワークシートに記入した内容をグループのメンバーで共有し、視点の違いについて話し合った。次に、事例について、もし自分たちが教員や学校に関連する専門職として関わる場合だったら、どのように対応するかグループで検討を行った。その際は、実際に自身が専攻する職種の立場から検討し、模造紙に事例への対応をそれぞれの専門職の役割を明確にしてまとめた。最後に教員がそれぞれの職種の視点から解説を行った。

## 3. 関連学会への運営協力

「教育支援・教育協働の実践と研究を推進し、教育支援協働学の確立を図ること」を目的として設立した日本教育支援協働学会2019年度大会の実行委員として学会運営のために活動した(新型コロナウイルス感染症の影響により開催予定日の2月29日・3月1日は中止し、翌年度8月22日に開催した)。

## 4. 結果の公表

- 1) 森川夏乃・岩山絵理・安藤久美子(2020).大学生におけるチーム学校の理解度について一学年間の比較を通して― 日本教育支援協働学会 2019 年度大会抄録集, 50
- 2) 岩山絵理・森川夏乃・安藤久美子(2020).教員と教育支援専門職の相互理解を目指した授業の教材及び教育内容、教育方法の検討 日本教育支援協働学会 2019 年度大会抄録集, 51
- 3) 岩山 絵理・森川 夏乃・真島 聖子(2020).教員と教育支援専門職の相互理解を目指した『チーム学校』入門合同授業実践報告 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要, 5, 205-210

## 令和 2 年度報告

### 1. 「チーム学校」アンケートの継続実施

#### 【目的】

チームとしての連携・協働に関する学生の認知や理解の程度について明らかにすることを目的としてアンケートを実施した。

#### 【方法と対象】

本学 1 年生、2 年生、3 年生、4 年生を対象にアンケート調査を実施した。初めて 4 学年揃う年度となった。しかし、この年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、例年通りの対面での一斉実施を行うことが出来なかったため、WEBによる調査実施方法に切り替えた。その結果、回答数が大幅に減少し、これまでの調査結果との比較が難しくなった。

1 年生は、907 人に配布し、323 人(回収率 36%)、2 年生は、907 人に配布し、207 人(回収率 23%)、3.4 年生が 1908 人に配布し、361 人(回収率 34%)から回答が得られた。

### 2. 「チーム学校」の理解を深めるための教材開発

「チーム学校」アンケートの結果より、「チーム学校」については、1、2 年生には学ぶ機会はあるが、3.4 年生には、学ぶ機会が大きく減少することが示唆された。専門の講義が多くなり、教育実習や心理実習、社会福祉実習等の経験をすることから、学部3年生において、「チーム学校」についての学びを深める機会が必要ではないかと、部門会議で検討された。

## 令和 3 年度報告

### 1. 「チーム学校」アンケートのまとめ

#### 1-1 1 年生の比較

2017 年度から 2020 年度に実施した「チーム学校」アンケートのうち、教員養成課程の 1 年生の回答について分析した。アンケートは後期の後半に実施されたが、教員養成課程の 1 年生の約半数が「チーム学校」という言葉を「初めて聞いた」と回答しており、教員養成課程の 1 年生において「チーム学校」は十分に認知されていなかった。また、「チーム学校」アンケートで用いられた「チーム学校」の理解測定尺度の項目のうち、児童・生徒支援に関する態度を問う項目について因子分析を行ったところ 3 因子が抽出され、児童・生徒支援に関する態度は「他職種連携必要性の認知」「教師の積極的関与意識」「教育支援専門職へのお任せ主義」の3つに区別された。そして、教師や教育支援専門職(SC・SSW・学校事務)の認知された理解の程度と児童・生徒支援に関する態度との関連について検討した重回帰分析の結果から、児童・生徒支援に関する態度は教師および各教育支援専門職の認知された理解の程度によって異なることが示された。

特に SSW は、児童・生徒支援において連携よりもお任せする存在として理解されている様子が見られた。SSW は「チーム学校」における他職種と比べ理解が十分でないことが認知されていたが、理解が不十分だという認知が支援をお任せする意識の高さをもたらしているのだとしたら、教員養成課程の学生の SSW について

の理解が進むことで児童・生徒の支援において SSW と連携することの必要性や重要性がより認知されるようになることが期待された。

### 1-2 「チーム学校」理解や他職種理解につながる学習機会の現状と課題

「チーム学校」アンケートを手掛かりに、学習機会の現状と課題を明らかにすることを試みた。アンケート項目の内、「『チーム学校』を理解するのに役立つ授業」を抽出した。その結果、「チーム学校」を扱う授業が、かなり特定されていることが分かったため、該当教科の教員の許可を取り、学習上の課題や教授上の問題を検討するために、インタビュー調査を行った。インタビュー調査には 3 名の大学教員の協力を得た。その結果、学生の学習状況のばらつきや時間の不足、教材の不足などによる指導目標の不明確さ、1 年生での学習の限界などが課題として挙げられ、実習経験を経た後の学習機会の必要性や具体的で現実的に「チーム学校」について理解するための教材開発の必要性が示された。

### 2. 「チーム学校」の理解を促す授業教材の提案

学部 3 年生に向けて全学で授業時間内に柔軟に使用できるオンデマンド教材の開発を行うこととなった。心理・福祉の大学教員、教員経験のある教職大学院教員、現在も現場で活動しているSSWが月一回の打ち合わせをもって教材開発の検討を行った。教材の実際の作成に関しては、上記打ち合わせメンバーのほか、SCや学校事務経験のある大学教員、現職の養護教諭、特別支援教育コーディネーターの経験がある元教員の協力を得た。

### 3. 結果の公表

安藤久美子・安藤直樹・岩山絵理・森川夏乃(2022).教員養成課程の 1 年生は「チーム学校」をどのように理解しているのか 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要第 7 号 127-134

安藤久美子・岩山絵理(2022).「チーム学校」理解を深めるための教材開発-教育学部 3 年生用の多職種連携理解教材として日本教育支援協働学会 第 4 回研究大会抄録集, 61

岩山絵理・安藤久美子(2022).「チーム学校」理解や多職種連携理解に繋がる学習の現状と課題-教員養成課程の学生に対するアンケート調査を手掛かりに-日本教育支援協働学会 第 4 回研究大会抄録集, 62

#### 報告書執筆者

安藤久美子(教職キャリアセンター 教育支援専門職研究部門 部門長/心理講座教員)

岩山 絵理(教職キャリアセンター 教育支援専門職研究部門 /福祉講座教員)

お問い合わせ先: 教職キャリアセンター 教育支援専門職研究部門 電話(0566)26-2717

報告書の詳細は以下のホームページにて公表しています。

<https://tc.aichi-edu.ac.jp/database/report/>